

出品作品リスト

No.	作品名	作者名	時代・世紀	品質	法量(cm)	コレクション／特記事項
1	十六羅漢 注荼半呿迦尊者	山崎朝雲(1867-1954)	大正13年(1924)	ブロンズ	総高66.0	
2	寒山拾得図	仙厓義梵(1750-1837)筆、 太室宗宸(1763-1847)賛	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦90.0 横27.1	山崎朝雲旧蔵
3	大通和尚宛書簡草稿	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨書	縦23.5 横31.8	石村コレクション (富田溪仙旧蔵)
4	放屁図写し	富田溪仙(1879-1936)	明治40年(1907) 頃	紙本墨画	縦35.9 横52.4	
5	福神図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	絹本墨画	縦74.0 横33.0	博多百年蔵コレクション
6	慕図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦34.5 横52.2	加野宗三郎氏遺品 2023年度加野象次郎氏 寄贈
7	臨済栽松図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦92.7 横27.1	三宅コレクション
8	三徳宝図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 文政13 年(1830)	紙本木版	縦77.6 横25.5	三宅コレクション
9	猫の恋図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦28.5 横34.5	九州大学文学部蔵 (中山森彦旧蔵)
10	円相図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦43.2 横56.2	九州大学文学部蔵 (中山森彦旧蔵)
11	天神図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	絹本墨画	縦99.4 横28.6	九州大学文学部蔵 (中山森彦旧蔵)
12	子孫繁昌図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦123.8 横49.3	石村コレクション
13	虎図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦94.0 横57.3	石村コレクション
14	犬図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦25.7 横35.8	石村コレクション
15	双狗図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦31.2 横52.4	小西コレクション
16	猪図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦32.1 横56.2	小西コレクション
17	富士山図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦28.0 横44.8	小西コレクション
18	宗七宛書簡	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨書	縦22.9 横32.2	小西コレクション
19	白磁鼎形香炉		清時代 嘉慶年間 (1796-1820)	磁器	高9.5 口径5.9 胴径6.4	小西コレクション



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051 (代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

せん がい

仙厓展 福岡のレジェンドコレクターズ

Exhibition of Sengai's Artworks

会期 2026年7月29日|水|-9月27日|日|

※本展は7月29日|水| -11月29日|日| の会期で開催する「仙厓展」の前期展示です。
本展終了後は、大幅な展示替を行い後期展示を実施します。

会場 古美術企画展示室



出品No.14《犬図》

仙厓義梵（1750-1837）は、日本最初の禅宗寺院である博多・聖福寺の住職を務めた禅僧です。親しみやすい書画を通して人びとに禅の教えを分かりやすく伝えたことから「博多の仙厓さん」と呼ばれて慕われました。

福岡のコレクターにとって仙厓の作品は、必須のレパートリーであり、多くのコレクションが築かれました。本展では、福岡ゆかりのコレクターに注目し、彼らの眼を通して仙厓作品の魅力に迫ります。
（学芸員 宮田 太樹）

仙厓を慕った福博の美術家

一山崎朝雲と富田溪仙一

博多出身の彫刻家である山崎朝雲（1867－1954）は、仙厓義梵（以下、仙厓）に傾倒し作品蒐集に努めた人物の一人で《**寒山拾得図**》（**No.2**）は朝雲がかつて所蔵していました。本作を収める箱の蓋裏には、幻住庵の住職であった韜光玄譲が**大正13年（1924）**に記した箱書があります。幻住庵には仙厓が晩年を過ごした虚白院があり、韜光玄譲は当時仙厓作品の目利きとしても知られていました。

山崎朝雲は、東京を拠点に活動していましたが、福岡の寺社からの仕事も引き受けていました。かつて仙厓が住職を務めた博多・聖福寺の山門に安置する羅漢像をてがけたのも朝雲で、本作の箱書は完成した羅漢像の開眼式のために帰福した際に依頼したものです。ちなみに、聖福寺山門に安置された羅漢像は木彫像ですが、この像から型取りしたブロンズ像（**No.1**）が当館に所蔵されています。

博多出身の日本画家である富田溪仙（1879－1936）も仙厓に傾倒した美術家の一人です。溪仙は仙厓作品（**No.3**）の蒐集に努めたほか、仙厓の画集を出版するなど、仙厓の顕彰に努めた人物でもあります。ちなみに溪仙が出版した画集『仙厓禅師遺墨集』には、溪仙のパトロンである京都の実業家・内貴清兵衛が所蔵していた《放屁図》が掲載されています。「これ食て茶のめ」と言いながら屁を放つなんとも品のない絵ですが、溪仙は本作を大変気に入っていたらしく、写し（**No.4**）を描いています。溪仙は先述の画集において、仙厓の書画の「自在なる変化其ものを尊む」と述べており、型にとらわれない仙厓の心のありようを愛していたようです。

仙厓はお酒が好き？

一博多百年蔵コレクションと加野宗三郎一

親しみやすい禅画で人気を博した仙厓のもとには、揮毫を求める人びとが絶えなかったそうです。こうした事情もあって仙厓の書画はゆかりのあるお寺はもちろんですが、福岡・博多で暮らす人びとの間に多く伝わっており、当地のコレクターにとって仙厓作品は必須のレパートリーのひとつでした。

当館の仙厓コレクションはこうした福岡ゆかりのコレクターの方々からのご寄贈によって成り立っています。本章で紹介する作品はいずれも福岡に古くからあ

る酒蔵に伝わったもので、作品にまつわるエピソードも仙厓の人柄がよくわかる興味深いものです。

《**福神図**》（**No.5**）は「博多百年蔵」で知られる造り酒屋・石蔵家に伝わったもの。本作をめぐっては次のようなエピソードが知られます。博多の正月を祝う松ばやしの行列が石蔵家の店の前を通りかかったときのこと。馬が暴れてのっていた大黒天が落馬してしまいました。新年早々縁起が悪いと不安がる主人が仙厓に相談したところ、「大黒天が天下ってくれたのだから良いことの前触れである」と言って本作を描きました。確かに、大黒天はにっこりと笑い、周りには宝珠が舞うなどおめでたい雰囲気にあふれた作品に仕上がっています。

《**墓図**》（**No.6**）も江戸時代から続く造り酒屋萬屋を経営していた加野家に伝わった作品です。本作を収める箱の蓋裏には当時本作を所蔵していた加野宗三郎氏によって、作品の由緒が記されています。それによると本作はある博多の酒豪が酒代のかわりに加野家へ持ち込んだものだそうです。加野家には、数百点もの仙厓作品が所蔵されていたらしく、その中には本作のように酒代のかわりに客から持ち込まれたものも含まれていたようです。

仙厓自身がお酒を嗜んでいたのかははっきりしませんが、造り酒屋やそこに集う人びととの交流を通して、多くの魅力的な作品が生み出されました。

仙厓研究に生涯を捧げる

一三宅コレクションと中山森彦一

仙厓が多くの人びとを惹きつけた要因は、作品の親しみやすさに加えて、禅僧としての経験に裏付けられた深い精神性にありました。

こうした作品の深みに魅了され、仙厓研究にのめりこんだ研究者も少なくありません。三宅コレクションを蒐集した三宅酒壺洞氏（本名：安太郎、1902－1982）もその一人です。三宅氏は博多の商家に生まれ、俳人・郷土史家として多才な活動を行いました。禅宗文化にも造詣が深く、『仙厓和尚語録』、『仙厓和尚年譜』など仙厓研究の基本文献ともいべき書物の公刊にも尽力しました。

三宅氏のご自身の著書において「研究家は蒐集家になってはいけない」という言葉を述べています。その理由は欲が出てしまい客観性が求められる研究に支障をきたすからだそう。今日の仙厓研究の基礎となる重要な足跡を残した三宅氏の自負も感じさせます。こうした発言を裏付けるように三宅コレクションには、ゆ

るくてかわいい仙厓らしい作品は含まれておらず、《**臨濟裁松図**》（**No.7**）のような謹直な画風のものや、《**三徳宝図**》（**No.8**）のように仙厓が自身の宗教観を表明したものなど禅僧としての厳しさを感じさせる作品がその大半を占めています。

三宅氏と同じく仙厓研究に生涯を捧げた人物として、忘れてはならないのが、中山森彦氏（1867－1957）です。中山氏は九州大学医学部の教授を務める一方で美術評論家としても活躍した人物です。また、コレクターとしても有名で、特に仙厓作品の蒐集と研究に情熱を傾けました。中山氏のコレクションは氏が亡くなった後に九州大学へ寄贈されています。

中山氏旧蔵の仙厓コレクションと言えば《**猫の恋図**》（**No.9**）のような愛らしい動物を描いた作品や《**円相図**》（**No.10**）のようなユーモアに富んだ禅画が有名ですが、コレクション全体としては仙厓がてがけた様々な主題や年代の偏りが少なく網羅的な内容であることが大きな特徴です。これは中山氏が自身の好みだけで作品を蒐集していたわけではなく、蒐集作品を通して仙厓の思想や人格を明らかにすることを目指したためであったように思います。

このような中山氏の態度をよく示す作品が《**天神図**》（**No.11**）です。学問の神として知られる天神様を描いたこの作品を中山氏は大変気に入っていたようで、本作と一緒に写った写真も残っています。

中山氏が本作を愛した理由は自身が学者であったから、ということはもちろんですが、仙厓が描いた作品であることにより深い意味を見出していたようです。仙厓は学僧としても有名で禅宗はもちろん、それ以外の様々な教えも柔軟に吸収しようと努めました。こうした学者としての柔軟な態度こそ、中山氏が仙厓を敬慕した最大の理由であったように思います。

さまざまな愛のカタチ

一石村コレクションと小西コレクション一

前章で紹介したコレクションが、研究者目線のコレクションであるとすれば、本章で紹介するコレクションは博多っ子目線のコレクションと言えます。

その代表が石村コレクションです。本コレクションを蒐集した石村善右氏（1908－1979）は、博多の和菓子店・石村萬盛堂を経営するかたわら、幻住庵の韜光玄譲のもとで禅を学んだほか、仙厓にまつわる逸話を集成した『仙厓百話』をまとめるなど、まさしく市井の人々の視点から仙厓へ近づこうとした人物でした。

博多で暮らす親子の様子を描いた《**子孫繁昌図**》（**No.12**）や愛らしい犬を描いた《**犬図**》（**No.14**）など、石村氏が蒐集した作品はどれも、人びとや生き物に対する仙厓の温かなまなざしを感じられるものばかりです。人びとから慕われた「博多の仙厓さん」の姿を今に伝えるコレクションです。

福岡市内で証券会社を経営していた小西友次郎氏（1887－1964）が蒐集した小西コレクションは石村コレクションとは少し違った仙厓愛を感じさせるコレクションです。

仙厓の温かいまなざしを伝える動物を描いた作品（**No.15、16**）だけでなく、仙厓が友人に宛てた手紙（**No.18**）や仙厓が愛用した日用品（**No.19**）などが含まれるのが特徴です。作品はもちろん仙厓その人に対する深い愛情を感じさせます。《**富士山図**》（**No.17**）のように表具にこだわりを見せる作品もあり、お気に入りの作品におしゃれさせたい、というコレクターの思いが伝わってきます。

おわりに

以上、コレクターの視点から仙厓の作品を紹介しました。その顔ぶれはアーティストや経営者、そして研究者など様々ですが、いずれも各業界の第一線で活躍し、福岡の近現代史を彩った方々です。

彼ら福岡のレジェンドコレクターの思いを感じながら仙厓作品の魅力に触れていただけたら幸いです。

主要参考文献

※ここで紹介している書籍や図録はいずれも2階の情報コーナーで閲覧することができます。
淡川康一編『仙厓墨蹟 一富田溪仙畫伯遺愛一』マリア書房、1954年
三宅酒壺洞『博多と仙厓』文献出版、1978年
石村善右『仙厓百話』文献出版、1980年
『仙厓 一石村コレクション一』福岡市美術館、2005年
『仙厓展 一九州大学文学部所蔵中山森彦コレクション一』九州大学文学部、2009年
『別冊太陽 日本のこころ243 仙厓 ユーモアあふれる禅のこころ』平凡社、2016年
『開館50周年記念 大仙厓展 一禅の心、ここに集う』出光美術館、2016年
『九大百年 美術をめぐる物語 1911－2016』福岡県立美術館／九州大学総合研究博物館、2016年
『仙厓 一小西コレクション』福岡市美術館、2019年